

「カネを乗り越える」中山千夏著 を読んで 2015年10月23日

「カネを乗り越える」とはいったいどういうことなのか、改めて考えてみた。

人間のもつ抽象化能力は、物の価値を比較し、それを数に置き換えたのがカネの始まり、と著者は説く。以来、カネによって物流は促進されて、人間は物質的に豊かな社会をつくり出した。

今日、われわれが生活していく上でカネはなくてはならないものだ。人間のカネに対する執着は食欲、性欲、いや、それ以上の勢いだ。身体そのものに基本を置く、食欲、性欲は、ある程度の制約や限界はあるが、脳によって純粹培養されるカネ欲はとどまることを知らない。時にカネ欲は人の命さえ奪う。保険金殺人などはその典型であろう。

しかし、そもそもカネ欲は、もって生まれた人間の本能ではなく、人工的に作られた欲望である。

著者は次のように指摘している。

「カネに対する欲望は、必ずしも自然のものではない。意図的に計画的に作り出されたものである。資本主義経済というものはとどまることのない収入の増大と、消費の増大を画策するもののようです。物質に際限がある以上それは無理だと思いますが、問題はそのためにながされているかということです。激しい洗脳によってカネ欲が刺激され、私たちはもっともっととカネを欲しがり、その結果、カネの価値が異常に高まりついには生命の軽視に至っている。」

基本的にカネ儲けは利己的な行為であると、著者は言う。世の中のカネの流れは複雑だが、単純化すれば博打と同じで、誰かが儲ければ誰かが損をする。みんなで仲良くカネ儲けをすることはできないのだ。

そして、それは富める国と貧しい国の関係についても同様である。貧困が戦争の引き金になるのは歴史的事実だ。

資本主義国や共産主義国にかかわらず、カネ儲けを是とするのは、世界共通の価値観である。

実際、個人的には、カネ持ちになればなるほど心の余裕が生まれ、漠とした幸福感を覚えるのでは、と思うことがある。

しかし、著者は「事実として幸福はカネで買えない。買えるのはあくまでも物質や情報だけです。その物質や情報で幸福になるのは、カネの動きではなくて、その人の心の動きです。」そして、「カネのないものが不幸を被るのは生命や生活環境よりも売買を優先し富の不均衡を放置する社会システムの結果であるのに単純にカネのないのは不幸だと思ってしまう。」と説く。

作中の仮想の超人マンバ様は、こう断言している。「勝手な金持ちは見たことはあるが、自由な金持ちは見たことがない。傲慢な金持ちは見たことがあるが、幸福な金持ちは見たことがない。」

著者は、賃金労働と無報酬の家事労働を対比させて、「人間にとってカネにならない労働が大切なのは、自発性を発揮して自己を解放し、情愛に満ちた人間関係を築くことができる。」と言及する。人にとって最も身近な労働であり、生きていく上でなくてはならない家事労働に、もっと様々なかたちで多くの人が参加することを奨励している。

最後に長くなるが、本文より引用する。

「二つに分裂しているような奇妙な感じを持つ。一つの世界は働いたり遊んだり考えたりしている独自の人生を送っている私がいる世界。人生世界と呼ぶ。もう一つの世界は消費者という得体のしれない集団に吸収される世界。こちらを市場世界と呼ぶ。

私たちはカネなしには生きられないし、市場世界を無視することはできません。しかし、本道を市場世界に選ぶ必要もありません。むしろ、人生世界を中心とする生活に戻る方法を真剣に考えるべき。」

「市場世界にどっぷり浸かって物事を見るな。人生世界に腰を据えて市場世界を透かし見よ。

可能な限り人の自由を奪わないこと。悪条件に置かれた人も平等に人生を全うできるように可能な限り弱者を優遇すること。人間は自由にふるまい仲良く助け合っている状態が幸福なのだから・・・。」

「市場世界の法律がそれに反するのは明らか。追求するのはカネを得る自由でしかありません。カネ儲けを是とし稼ぐものを優遇する法律のため弱者の立場になる。本質的な弱者ではない。人間のありようとしてカネ儲けを必ずしも是としない、稼ぐものを優遇しない、稼げないものも含めて万人の自由を追求する。それが人生世界の法律。」

最終的には、カネ儲けを是としない、資本主義的経済学でもなく共産主義的経済学でもない、新しいタイプの経済学が必要になってくる。

「カネを乗り越える」とは、市場世界にどっぷり浸かることなく、人生世界に重心をおいて、市場世界と付き合っていく生き方をするということであろう。